〈研究論文11〉

明治後期における井上哲次郎と井上円了の思想対立

三浦節夫

近代日本の思想家としての井上哲次郎と井上円了（以下、哲次郎、円了という）の思想については、昭和三六年の家永三郎[1]氏と舩山信一[2]氏の先行研究があり、最近では末木文美士氏の思想論[3]があげられる。これらの研究では、哲次郎と円了の間には思想の同一性や相互補完性があることが明らかにされてきた。現在、両者の主要な著作などの研究資料は整いつつあるが[4]、本稿では先行研究を踏まえながら、明治後期における思想対立に焦点をしぼって新たな問題提起を行いたい。

哲次郎は安政二年（一八五五）に生まれ、儒学や洋学を学び、明治一〇年創立の東京大学で哲学を修め、一五年三月に東京大学助教授に就任した。円了は安政五年（一八五八）に真宗大谷派（東本願寺）の末寺に生まれ、真宗・儒教・洋学を学び、本山に選抜されて東京留学生となり、東京大学で哲学を修め、明治一八年に卒業した。哲次郎と円了の年齢差は三歳であるが、卒業時では五年の違いがある。哲次郎と円了の関係は、哲次郎らが創刊した『東洋学芸雑誌』の一五年六月二五日号に、大学一年生の円了が「堯舜ハ孔教ノ偶像ナル所以ヲ論ス」という小論を投稿し、その文末に「巽軒曰」（巽軒は哲次郎の号）に始まる評論があるので、両者の最初の出会いは、哲次郎の助教授就任の直後と考えられる。

「哲次郎の教え子の円了」という表現は、研究論文によく見られるが、哲次郎は一七年一月に円了が主唱した「哲学会」の設立に協力し、翌二月にドイツ留学へ出発している。そのため、両者の教員と学生の関係は二年間である。教育による知識・思想の影響は当然考えられるが、清水乞氏の研究[5]から明らかにされているように、円了の初期の著作である『真理金針』『哲学要領』『哲学一

夕話』『倫理通論』『心理摘要』をみると、円了の思索が中心であるけれども、哲次郎も理論的思想的な影響を与えた一人として考えられる。

哲次郎がドイツへ留学した後の円了は、英文文献を中心に哲学研究に本格的に取り組み、在学中から雑誌・新聞に論文を発表し、卒業後は派遣された東本願寺教団には戻らず、また恩師が斡旋した大学の教員への道も断り、著作活動に専念してすでに記した初期の著作を発表し、啓蒙的思想家としての地位を確立した。そして、明治二〇年に哲学専修の専門学校として「私立哲学館」を創立した。翌年には、国粋主義（日本主義）を標榜する政教社の設立に参加し、雑誌『日本人』の創刊にかかわった。

哲次郎は留学期間が終えた後に、ベルリンの東洋語学学校の教師となり研究を継続していたが、両者の関係はこの時期にも断絶していない。留学中の日記を研究した福井純子[6]氏の論文には「井上留学期間（一八八四・四・二～一八九〇・八・八）交際日本人名」があり、第一位は円了で日記の二二か所に記されている。筆者はそれをもとに当時の両者の関係をまとめたことがある。[7] 円了は哲学館創立から一〇か月後の二一年六月に、突如として欧米各国の視察へ出発する。哲次郎の日記によれば、出発の前の二年間に、哲次郎からの書簡が五回あって、実際、円了のイギリス・ロンドン到着直後に、哲次郎は出向いて円了を迎えている。当然、両者はベルリンでも再会している。円了の帰国後の哲次郎からの書簡は二三年八月までに七回に及んでいる。円了の欧米視察はその後の思想や行動に転換をもたらしたものであり、密接な関係にあった留学中の哲次郎の知見も影響を与えたものと考えられる。

哲次郎は二三年一〇月に帰国し、帝国大学文科大学教授に就任した。日本では前年二月に大日本帝国憲法が発布され、哲次郎が帰国した同月に「教育に関する勅語」が発布され、近代日本国家の枠組みが示されたばかりであった。翌二四年一月に、いわゆる内村鑑三不敬事件が発生する。それから、哲次郎の天皇制国家思想の確立者として活動が始まる。五月に『内地雑居統論』を著し、九月に文部省の依頼を受けて勅語の解説書『勅語衍義』を刊行し、翌二五年一一月に「宗教と教育との関係につき井上哲次郎氏の談話」を雑誌に発表して、哲次郎は教育勅語＝国体の立場からキリスト教に対して論争を提起した。近代日本思想論争として知られる「教育と宗教の衝突」事件の始まりである。この論争は、教育と宗教一般の関係ではなく、最大の争点はキリスト教が天皇制思想（教育勅語）と両立するかにあり、天皇制思想に依拠したキリスト教攻撃とその防戦の形で展開されたものである。吉田久一氏によれば、関係資料は二五～二六年を中心に新聞報道も含めて二二〇点に及ぶといい、哲次郎が『教育ト宗教ノ衝突』と題して出版した著書で、キリスト教と仏教の比較を論じたために、教育勅語（国体）とキリスト教の関係という主題から、「社会的にも仏教とキリスト教の衝突という形[8]」に拡大したと言われる。

円了は一八年の大学四年生のときに「余が疑団何れの日にか解けん―耶蘇教を排するは理論にあるか」を『明教新誌』に連載し、それが『破邪新論』『真理金針　初編』として単行本化され、また『仏教活論本論第二編　破邪活論』を著し、進化論などの哲学・理学の近代諸学とキリスト教が合致しないことを取り上げた。この著作から、現在でも円了といえば明治中期の排耶論者として知られているが、円了は「教育と宗教の衝突」事件に最初からかかわっていない。この時期の円了は、ほぼ完成した哲学館の新校舎が暴風雨によって倒壊し、その再建で負債を抱え、その解決策として全国各地で学術講演会を開きながら、創立寄付金を集める「館主巡回」を二三年秋から行っていたからである。講演日は、二三年が四四日、二四年が一五三日、二五年が一五四日、二六年が三九日で、足掛け四年間に三九〇日を費やして、北海道から九州まで巡回していた。これが終わった二六年に、『日本倫理学案』『教育宗教関係論』『忠孝活論　附仏門忠孝論一斑』を続けて刊行しているから、円了も論争への関心をもっていただろうが、舩山信一氏が述べているように[9]、両者のキリスト教批判については、円了は仏教そのものの立場からの批判が強いが、哲次郎は教育・国家主義教育・国体論を優先する立場という、態度の相違があった。

現在では、この論争を「教育と宗教」第一次論争と呼んでいるが、これから述べる第二次論争を提起したのも、哲次郎である。三二年一〇月、東京帝国大学文科大学長となっていた哲次郎は哲学会で「宗教の将来に関する意見」という講演を行い、それを一二月の『哲学雑誌』に発表した。この論文が翌年の「教育と宗教」第二次論争のはじまりとなった。

哲次郎が再び問題を提起せざるをえなかった背景として、条約改正を前提とした三二年の文部省訓令第一二号という学校における宗教教育禁止[10]や、第一四回帝国議会における宗教法案論議[11]（仏教界の反対運動もあり、採決の結果、否決された）が考えられる。直接の要因は、一〇年に満たない状況の変化によって、教育勅語＝天皇制思想教育がさまざまなところで不適合になりつつあったからである。それは修身科廃止論や当時の西園寺文相の教育勅語改定論などに見られる。

哲次郎と円了の思想対立はこの第二次論争の継続において起きるが、きっかけとなった哲次郎の「宗教の将来に関する意見」[12]という論文の要約をまず記しておこう。

現今のわが国の宗教の儒教、仏教、キリスト教、神道はいずれも「凋衰廃滅」の状態に近く、民族の将来の精神界を支配する有力なものはなく、それ故に国民教育に対しての影響力はない。教育と宗教は分離しているが、これは「我国民の遂行せる一進歩」であり、一度分離したものは永遠に維持しなければならない。ところが、明治以来、知育は発展したが、徳育はその反対に以前より退歩した。教育と宗教の分離によって、徳育の基本を失った。

現在の倫理学は理屈を教えるだけで、人をして行わしむる道徳の動機づけが欠如している。これが今日の教育界の一大問題となっている。

今、改めて仏教、キリスト教、儒教の各宗教の長所と短所を再検討すると、たとえば仏教では、長所として、伝来から千年以上の歴史があって国民の精神上に「既得権」をもつこと、純正哲学としての理論があること、これに対して、短所として、その教えは「茫漠」として理解しがたく、極めるには万巻の経典を読破しなければならないこと、厭世教にして悲観主義や禁欲主義があげられる。キリスト教は、西洋各国の宗教であり、また国民の徳育の根底にある。その教えは仏教より理解しやすいが、「唯一神」の信仰はわが民族の精神と「敵抗」するもので、永遠に衝突するものである。儒教にも同じく長所と短所がある。したがって、このような成立宗教に、徳育の動機づけを求めることはできない。

ところが、局外よりみると、諸宗教の根底における契合点があり、それは「実在の観念」であり、その「実在の観念」は人格的、万有的、倫理的の三種類に分けられる。これを比較対照してみると、「倫理的実在」が諸宗教の契合点にふさわしく、それは具体的にいえば、「先天内容の声」で「一切を融合せる無限の大我より来たるの声」とも呼ぶべきものである。この大我に従う倫理は、諸宗教の共通点であり、実行上で「最も効力ある主義」であり、これ故に一切の宗教の形態を離れて、わが国の教育の現在の欠陥を充たすものである。この大我（倫理的実在）を中心とする新宗教は「倫理的宗教」（宗教的倫理）であり、哲学および自然科学と併存し、日本主義とも衝突しないもので、将来においては歴史的宗教が今日の時勢に適応するように合理的に変形しない限りは衰退してしまい、倫理的宗教が将来の普遍的宗教になるであろう。

哲次郎は最初に、第一次論争で主張した「教育と宗教の衝突（分離）」を維持し、キリスト教のみから成立宗教へ批判を拡げつつ、当時の徳育の問題を取り上げている。その欠陥の解決に、「倫理的宗教」を提唱している。その狙いは、「動機づけの回復による徳育（＝天皇制イデオロギー教育）の硬直化・形骸化の是正と、天皇制イデオロギー教育を倫理的宗教という、より普遍的なものにリンクすることによるその権威の再確立[13]」にあった。

第二次論争に関する資料は、「明治三二年後半から翌三三年末にかけて約六〇種類[14]」あると言われる。第一次の資料数は約二二〇種類だったから、第二次は小さな論争に見えるが、天皇制を擁護する体制派が教育勅語や修身教育に疑義を発したことに、意味の深さがある。

円了はこの第二次論争のときも、当初から加わっていない。論争の前の二九年末に哲学館を焼失したからである。三一年に校舎を移転・新築するなどの新しい事業に取り組んだ。再び資金募集のために、三二年は八八日、三三年は九二日、三四年は一一一日、三五年は一六一日と、第二回の全国巡回講演を行っている。第二

次論争は比較的短期に収束したが、その後、哲次郎に対する宗教の本質に関する論争が行われた。哲次郎と円了は三三年四月に、ともに修身教科書調査委員に就任しているが、円了は翌三四年七月に「余が所謂宗教」[15]を『哲学雑誌』に発表した。円了の哲次郎への反論を要約しておこう。

明治維新以来、百般の事物は一変されたが、宗教だけは改革がなく、偉業の一半未だ成らずという状態である。今、世間では公徳問題が起こり、これを改良すべきとするが、その実行を教育部内に委ねるのみで、宗教界に着目しない。この公徳問題の改良には宗教の改良が必要であると信じる。ところが、現在、宗教の改良については旧仏教を「厭忌する風」が強く、新宗教を喚起しようという傾向にある。このような提起は巽軒博士（哲次郎）の宗教意見である。いわゆる「先天内容の大我より発したる宗教革新の声」であり、自分のごとき「小我の声」とは異なるが、その相違点はつぎの三点であろう。

第一に倫理の成分をとらえ来たりて宗教の第一原理とすること。

第二に諸宗教を一括して総合的新宗教を構成すること。

第三に人格的実在を宗教の組織中より全然除去すること。

とくに第一は重要で、それは宗教そのものを倫理中に同化しようとするものである。いずれの宗教も「倫理の一要素」はあるが、倫理は宗教の目的を達成するための「一方便」である。宗教の目的とはなにか、「余が所謂宗教」を述べると、人に宗教心が起こるのは外部から注入・装成されるものではなく、「人生自然の発達上内部より開展」したものである。宗教は人の思想の反面より反射して来るもので、釈迦やキリストが「方便工夫」で仮設したものではなく、「人心中に胚胎せる先天の声によりて喚起」されたものである。

道理を追求する学者は、「偏頗なる眼を以て宗教の真価を評定」しようとする。宗教を知る学者も、仏教やキリスト教などの教理の大綱を知るのみである。巽軒博士は、「未だ仏教の味も耶蘇教の趣も感知せざりし人なれば、其の宗教に対する意見に至ては表面外部の観察に過ぎず」、その評論は「秋山郷の蝋燭談」のように見当違いである。倫理は倫理であり、宗教は宗教である。宗教を倫理に同化するのは、倫理を宗教に同化するとともに不都合なことは同一である。巽軒博士の説に賛同することができない理由である。

他教はさておき、巽軒博士のいう仏教の短所については、まず「経論広漠」で理解しにくいというのは、蔵経の巻数を数えて仏教を廃することを主張するもので、これはウェブスターの辞典の字数を数えて英語学習の尽くし難い故に廃学するものと同一である。仏教の理解は選択取捨された経典を学ぶことで可能である。また、厭世主義、禁欲主義の問題はこれまでの仏教の発達からみて、あえて改良を加えなくても自然の勢いに任せてよい。

今日のいくつかの宗教にはその根柢に潜在する未発のものがあ

り、「従来の宗教に改良発達を加へて今後の学術と併行」させ、時勢と適応するものとすれば、新宗教を開立する必要はない。巽軒博士のいう、諸宗教の根柢における契合点をとって普遍的宗教を組織するのは「学者の迷夢に過ぎず」、巽軒博士が「大我の声」をもって契合点として主唱しても、人はこれを「巽軒教」と呼ぶばかりであろう。

円了は哲次郎に対する反論として三項目をあげているが、論文の末尾に「本論は全く巽軒博士の宗教意見に反対の意を述べたる」もので、その反論の中心は第一の「倫理の成分をとらえ来たりて宗教の第一原理」にあると記しているので、ここでの要約もそれに従ったが、円了の論文には随所に哲次郎の意見への嘲笑的表現がある。哲次郎は従来の宗教の人格的実在を否定して倫理的実在＝「大我の声」によらんとするが、円了は大衆が信仰するには人格的実在を表象する「大我の形色」が必要であると主張し、「巽軒博士の大我と掛けて何と解く、浜の松風と解く、その意は音ばかり」と侮蔑的に言い放っている。

哲次郎と円了の論争には、哲次郎は宗教を命令的に教訓して人を従わせるものとし、円了は宗教を「人生自然の発達上内部より開展した」ものとするという宗教観の相違などがあり、その後もつぎのように両者の対立は続いた。

三五年一月・四月――哲次郎は「余が宗教論に関する批評を読む」[16]を公表して、主たる対象として円了を含む一〇編の論文への、総括的理論的な反論を試みた。

五月――円了は「宗教改革案」を『読売新聞』に出してから、単行本として『宗教改革案　附宗弊改良論』[17]を著して、公徳問題の解決を学校教育のみとせず、家庭・社会の教育からはかる必要性を述べ、それには仏教界や住職の学力の向上を政府の干渉によって行い、教科大学の設置、転宗自由の制度などを主張した。

同五月――フランスの雑誌が哲次郎と円了の宗教論争を取り上げ、『哲学雑誌』の彙報欄に「ル、ビューの我が哲学雑誌に関する一節[18]」として抄訳が掲載され、「円了博士の論鋒は頗る鋭利にして熱情湧くが如し」と評価した。

八月――哲次郎は「「ラ、ルビュー」の哲学雑誌批評を読む[19]」という論文を発表して、『ラ、ルビュー』の評論が円了の主張に偏向し、自分の所論が誤解されているとして、円了個人への反論を声高に侮蔑的に行った。

一〇月――哲次郎は「将来の宗教[20]」という談話を雑誌『新仏教』に発表し、「宗教は倫理と同じだ」「精神の安慰を得られない、安心立命の出来ない道徳ならば、それは真の道徳ではない……こういふ道徳は即ち将来の宗教」であると語り、円了の宗教改革案も「政府の保護」を求めるものとして否定した。

同一〇月――円了は『勅語玄義』を出版し、教育勅語の解釈を絶対的釈義と相対的釈義にわけ、勅語の諸徳目を平時の「孝友和信、恭倹博愛、修学習業、智能徳器、公益世務、国憲国法」、変

事の「義勇奉公」に分けて、これを「忠」としその実現が「以テ皇運ヲ扶翼スヘシ」となることを明らかにした。その帰結に、「わが国特有の道徳たる絶対的忠孝の大道を伝うるには、神、儒、仏の三道が最も適することは明らかなりと知るべし」と記して、公徳問題と宗教との関係についての自説を再び主張した。

一一月――哲次郎は『巽軒博士倫理的宗教論批評集　第一輯』を刊行した。[21] この論争のきっかけとなった「宗教の将来に関する意見」など自説の三編を原論とし、これに対する二二本の批評を集めて編集させたもので、円了の「余が所謂宗教」もあるが、哲次郎の諸論文への反論である「余が宗教論に関する批評を読む」は収録せず、円了個人への反論となった「ラ、ルビュー」の哲学雑誌批評を読む」を巻末に据えた。

このように哲次郎と円了が対立していた渦中の一二月に、円了の哲学館に対して、文部省が中等教員無試験検定校の認可を取り消すという処分があった。いわゆる哲学館事件の発生である。不適とされた倫理学の担当教員の中島徳蔵が文部省の処分を不当とする反論を新聞に掲載して、翌三六年に文部省に対する批判が起こり社会問題になった。[22] この事件に関する記事や論文は、中島が反論した二月～三月が多い。哲次郎は、三月に丁酉倫理会が中島徳蔵の教授法に問題なしとした、この学会での決議に反対を表明し、四月から盛んに文部省擁護の論陣を張る。この中で、円了がモットーとする「護国愛理」は忠君愛国の精神を鼓吹するものであったが、「所が如何なる風の吹回はしにや、哲学館事件が忠君愛国を嘲笑するが如き機会を与へたといふことは甚だ意外のことであります」[23] と述べて円了や哲学館を非難し、この機会にキリスト教徒が教育界は偽忠君偽愛国であると極端な攻撃を行っているという形で、公徳と宗教の問題にすり替えるなど、文部省への批判を封じようとしている。

円了は哲学館事件の発生を第二回の海外視察中のロンドンで知った。三六年七月に円了は帰国したが、哲学館事件の原因については明らかにしていない（ただし、「役人」批判をしているから、[24] 仕組まれた事件と見ていた可能性がある）。帰国から二か月後に、円了は「修身教会設立旨趣」を発表する。この趣意書によれば、日本と西洋各国との国勢民力には大差があり、その格差が日本社会の不道徳にあり、欧米社会の日曜教会のように、道徳を改良する「修身教会」活動を全国で展開し、各地の寺院を会場とし、教員と僧侶が教育勅語にもとづき、「忍耐勉強倹約誠実等百般の職業に必需の道徳を諭示し、進んでは家庭の風儀、社会の習慣を一新する」[25] ことを目的としたものである。

円了はこの教会を全国的な組織とせず、各地を結ぶ通信雑誌だけを発行し、自身が全国巡回講演をして普及につとめようとした。この趣旨書は国務大臣、府県知事、市町村長へ配布された。この運動には哲学館事件の問題の他に、哲次郎と論争のあった公徳と宗教の問題への具体的対応があったと考えられる。哲学館大学に

設置されたこの「修身教会」運動は、円了の側近の高島米峰によれば、構想と規模は壮大であったが、日露戦争が開戦となって思ったほどの成果が挙がらなかったと言われている。哲学館大学では文部省への中等教員無試験検定の再認可を求める動きもあって、折り重なる事情のために円了は「神経衰弱症」となり、三八年一二月に大学や中学校から隠退を決意し、以後、修身教会運動に専念し、叙勲を固辞するなど政府との距離を保ちながら、全国各地を巡回講演するという社会教育を個人で展開したが[26]、大正八年に中国・大連での講演中に死去した。

哲次郎は「宗教の将来に関する意見」をきっかけに「教育と宗教」第二次論争を提起し、哲学館事件では文部省の立場を擁護し、明治四四年に『国民道徳論概論』を出版して権力による「上からの修身教育、国民教育」を徹底する立場[27]をとり、天皇制国家体制の代表的教学者となった。これに対して、同じ天皇制下における日本の近代化でも、円了の「修身教会」運動は民衆レベルの倫理の実践を求めた「下からの運動」に終始した。両者の対立には、宗教観の相違の他に、近代日本の思想の問題が潜在していると考えられる。

(1) 家永三郎「天皇制思想体制の確立」(『近代日本思想史1　歴史的概観』) 八二～八四頁

(2) 舩山信一『明治哲学史研究』(『舩山信一著作集』第六巻) 一〇六頁

(3) 末木文美士『明治思想家論』六二～六三頁

(4) 哲次郎関係の研究文献――主要な著作(復刻版)としては、『井上哲次郎集』全九巻。年譜としては、井上哲次郎『懐旧録』と井上正勝編『井上哲次郎自伝』(ともに『井上哲次郎集』第八巻)と、酒井豊「井上哲次郎史料目録」(『東京大学史史料目録』三)。文献目録としては、『近代文学研究叢書』第五四巻、昭和女子大学近代文化研究所。参考文献としては、同書の平井法「井上哲次郎」、島薗進他「解説」(『井上哲次郎集』第九巻)がある。
円了関係の研究文献――主要な著作(現代表記版)としては、『井上円了選集』全二五巻。年譜としては、拙稿「解説―井上円了と著述」(『井上円了選集』第二五巻)。文献目録としては、山内四郎・三浦節夫編『井上円了関係文献年表』がある。

(5) 清水乞「井上円了における近代西洋哲学研究の原点―「明治十六年秋　稿録」」(『井上円了センター年報』第一六号)、同「解説―井上哲次郎「印度哲学史」草稿と井上円了の『外道哲学』」(『井上円了選集』第二二巻)参照。

(6) 福井純子「井上哲次郎日記」(『東京大学史紀要』第一一号と第一二号)参照。

(7) 拙稿「井上円了『世界旅行記』補遺」(『井上円了センター年報』第一四号)参照。

(8) 吉田久一『日本近代仏教史研究』二二二頁、二二六頁

(9) 舩山信一『日本の観念論者』(『舩山信一著作集』第八巻)九四～九五頁

(10) 久木幸男「訓令一二号の思想と現実」(『横浜国立大学教育学部紀要』第一三集、第一四集、第一六集)参照。

(11) 高木宏夫「宗教法―法体制準備期」(『高木宏夫著作集』第二巻)、

井上恵行「宗教団体法成立までの各種法案」（『明治以降宗教制度百年史』）、佐伯友弘「明治三十二年における条約改正論議と第一次宗教法案―『明教新誌』に見るその教育史的意義について」（『日本仏教教育学研究』第九号）参照。

(12) 井上哲次郎「宗教の将来に関する意見」（『哲学雑誌』第一五四号）参照。

(13) 久木幸男「第二次「教育と宗教」衝突」事件」（『20世紀日本の教育』）二一頁

(14) 関川悦雄「「教育と宗教」第二次論争―倫理観・人間観の対立を中心に」（『教育学雑誌』第二一号）二頁

(15) 井上円了「余が所謂宗教」（『哲学雑誌』第一七三号、第一七七号）参照。

(16) 井上哲次郎「余が宗教論に関する批評を読む」（『哲学雑誌』第一七九号、第一八二号）参照。

(17) 井上円了『宗教改革案　附宗弊改良案』参照。

(18) 「ル、ビューの我が哲学雑誌に関する一節」（『哲学雑誌』第一八三号）参照。

(19) 井上哲次郎「「ラ、ルビュー」の哲学雑誌批評を読む」（『哲学雑誌』第一八六号）参照。

(20) 井上哲次郎談話「宗教の将来」（『新仏教』第三巻第一〇号）五二五～五二九頁

(21) 秋山悟庵編『巽軒博士倫理的宗教論批評集　第一輯』金港堂、明治三五年一一月。同書は「日本教育史基本文献・史料叢書二〇」として大空社から復刻され、巻末に関川悦雄氏の「解説」論文がある。

(22) 哲学館事件については、『東洋大学百年史　通史編Ⅰ』（東洋大学、一九九三年）が詳しい。哲学館事件に関する記事・論文を収録したものとして、清水清明編『哲学館事件と倫理問題』の正・続の二編（文明堂、明治三六年三月・八月刊行）が知られているが、同書に収録されているものは一六八件と少ない。東洋大学井上円了記念学術センターの調査によれば、現在判明している事件の記事・論文数は延べ数で五六四件に及んでいる。

(23) 井上哲次郎「哲学館事件の収結」（『教育界』第二巻第八号）二頁。哲次郎の哲学館事件に関する論文は、(22) の井上円了記念学術センターの調査によれば、著者別でみると、第二位と多い。事件の当事者とされた中島徳蔵の掲載件数は一五であり、哲次郎はこれについで掲載数が一二となっている。井上円了、丸山通一と同数であり、哲次郎は哲学館事件の主たる論争者である。哲次郎の論文を三六年の日付順に紹介しておこう。

「寄日出国新聞書」（『日出国新聞』第五〇六四号、二月二五日）

「注意すべき刻下の問題」（『中央公論』第一八―三号、三月一日）

「動機論と結果論」（『太陽』第九―四号、四月一日）

「動機論と結果論とを論じて宗教に及ぶ」（『和融誌』第七―四号、同五号、四月五日、五月五日）

「教育雑感」（『教育時論』第六四八～六四九号、四月一五日・同二五日）

「近時の倫理問題に対する意見」（『太陽』第九―六号、六月一日）

「哲学館事件の収結」（『教育界』第二―八号、六月三日）

「倫理に関する教育上の二問題」（『教育学術会』第七―四号、同五号、六月五日、七月五日）

「教育雑感（哲学館事件に対する断案）」（『教育時論』第六五三号、六月五日）

「動機と結果との関係」（『一橋会雑誌』第二号、六月二五日）

「近時の倫理問題につきて所感を述ぶ」（『下野教育』第一八八号、六月二九日）
「教育上注意すへき近時の問題」（『教育公報』第二七四号、八月一五日）

(24) 井上円了「新年を迎ふるの辞」（『東洋哲学』第一一一号）参照。

(25) 井上円了『修身教会設立旨趣』（明治三六年九月一四日）（『東洋大学百年史　資料編Ⅰ・上』）参照。

(26) 井上円了の修身教会運動については、拙稿「解説―井上円了の全国巡講」（『井上円了選集』第一五巻）参照。

(27) 哲次郎の国民道徳論については、末次弘「明治期における倫理思想」（『東洋学研究』第四四号）参照。

（みうら・せつお、
宗教社会学・近代日本思想・近代日本仏教、東洋大学井上円了記念学術センター専任研究員・教授）